

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Future trends in the biology of language(3月9・10日 三田キャンパス北館ホール)
Sub Title	
Author	尾島, 司郎(Ojima, Shiro)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.16, (2011. 7) ,p.2- 2
Abstract	
Notes	平成22年度拠点全体シンポジウム
Genre	Research Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000016-0020

平成 22 年度拠点全体シンポジウム

Future Trends in the Biology of Language

(3月9・10日 三田キャンパス北館ホール)

拠点全体シンポジウム Future Trends in the Biology of Language が、2011年3月9・10日の二日間、三田キャンパス・北館ホールにて行われた。「言語の生物学」というタイトル通り、言語学のみならず、進化、遺伝、神経科学など多方面から、最新の研究成果や現在進行中の研究が発表された。

一日目午前の Genetics of Language のセッションは、拠点メンバーの安藤寿康教授が先陣を切って、双生児の「かな」の獲得における、遺伝子の影響の発現時期について報告した。次いで、国際医療福祉大学の桃井隆教授が、人の言語障害に関係している FOXP2 遺伝子をノックインしたマウスでは、コミュニケーション手段である Ultrasonic vocalization に障害が出ることを報告した。午前最後の講演では、Harvard Medical School & University of Minho の Dr. Ana Pinheiro が、遺伝子欠損による障害であるウィリアムズ症候群の言語能力について、先行研究に疑問を投げかけるデータを発表した。

午後の Evolution of Language のセッションは、北陸先端科学技術大学の橋本敬教授の、言語進化に関するシミュレーション研究と、日本人成人を対象とした行動実験の紹介で幕を開けた。東京大学の岡ノ谷一夫教授は、鳥やげっ歯類などのデータから、文法や意味が、種々の segmentation というプロセスを経て進化したとする説を展開した。最後に、Catalan Institute for Advanced Studies の Cedric Boeckx 教授が、人間言語に特異的だとされる recursion (再帰) をさらに decompose すれば、通常の進化学的手法で言語進化を研究できるという展望を紹介した。

2日目午前の Neuroscience of Language セッションは、事象関連脳電位 (ERP) のデータが続けて紹介された。まず、拠点の尾島司郎特別研究助教が、外国語の学習が母語に対して良い影響を与える可能性を示すデータを紹介した。次に、Bangor University の Guillaume Thierry 教授が、バイリンガル話者では、その時に使われてない方の言語も自動的に脳内で活性化されているというデータを提示した。最後に、McMaster University の John Connolly 教授が、脳損傷や脳卒中によって植物状態に陥ったと考えられる患者でも、ERP を用いて意識があることを確認することができることを例示した。

シンポジウム最後のセッション Acquisition of Language では、拠点メンバーの今井むつみ教授が、感覚に根ざした sound symbolism が幼児の単語の学習を助けることを示すデータを提示した。明治学院大学の佐野哲也教授は、日本語の文における

scrambling と topicalization という二種類の統語的依存関係の違いが、未就学児の脳内文法にも組み込まれていることを示すデータを紹介した。最後に、拠点メンバーの津由紀雄教授が、「しりとり」を利用した実験により、かなり年齢の低い子供からもメタ言語意識に関するデータが得られることを紹介した。

ディスカッサントの東北大学・大隅典子教授は、言語の生物学に魅了される自分がいるとしつつも、言語学と遺伝子研究の間には未だ非常に大きなギャップがあると総括した。

シンポジウム全体を振り返ると、言語の自律性という、一つの隠れテーマが浮かび上がる。チョムスキーの生成文法を中心とするこれまでの理論言語学は、敢えて極論するならば、言語を他の認知機能とは違う特別な物として捉えてきた。FOXP2 やウィリアムズ症候群は、かつてそのような考えの証拠として解釈されたが、シンポジウムで提示されたデータは、他の認知機能との繋がりを支持すると解釈できた。言語が特別であることの最後の砦である recursion (再帰) さえも、さらに decompose すれば特別な認知能力ではなくなるという。言語生物学の Future Trends は、言語の自律性よりも、他の認知機能との連続性を強調する方向にあることを感じさせられた。

シンポジウムの翌日には東日本大震災が起り、海外からの招待講演者の帰国が困難になったが、4人とも不満を述べることなく落ち着いて対応してくれたことは救いだった。開催1か月前には、アメリカからの招待講演者がラボを首になり、発表をキャンセルした。急なピンチヒッターを受け入れてくれた Dr. Pinheiro は、手違いにより成田到着が発表3時間前になるトラブルを乗り越え、見事な発表をしてくれた。彼女を含め、企画者の意図に快く従って、シンポジウムを形作ってくれた講演者は、本当のヒーローである。

(尾島司郎)

On the 9th and 10th of March, 2011, our centre hosted an international symposium entitled Future Trends in the Biology of Language, in which renowned researchers were invited from both within and outside Japan to present their ongoing research on the genetics, evolution, neuroscience, or acquisition of language. One trend that emerged from the symposium is to deemphasize the uniqueness of human language and focus more on the continuity between language and other cognitive abilities. This trend may be one possible future direction for multidisciplinary research institutes like ours.

